

難治性鼻出血に対する手術室での止血処置、蝶口蓋動脈焼灼術の有効性

武市直大、乾崇樹、谷内政崇、萩森伸一

(大阪医科薬科大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科)

【緒言】

鼻出血は耳鼻咽喉科領域の救急疾患のひとつである。キーゼルバッハ部位を含めた鼻腔前方領域からの出血の制御は比較的容易である一方、後方領域からの出血は出血点の視認、操作に難渋しうることから難治となりやすい。一般に鼻内のパッキングによる止血が試みられているが、再出血により複数回の処置を要する例もある。当科では外来での止血に難渋する例は積極的に入院とし、再出血を来した場合には手術室での出血点の評価と止血操作を行っている。本研究では、入院加療した特発性鼻出血例について全身麻酔下に行う出血点の探索と止血処置、蝶口蓋動脈焼灼術の有用性について後方視的に検討した。

【対象】

2012年1月から2025年3月の間に当科で入院加療した特発性鼻出血135例を対象とした。このうち50例は鼻内パッキングなどの保存加療を行い（非手術群）、85例は手術室での止血術（蝶口蓋動脈焼灼術）を施行した（手術群）。

【結果】

入院時点で出血点が把握できていなかった例は非手術群で23例、手術群で68例であり、有意に手術群に多く見られた（ $p<0.001$ ）。2017年からの手術群で止血の再手術を要した例は1例のみであり、高い制御率を根拠に対象期間の後半は手術群において、可能な限り手術終了時の鼻内パッキングを行わないこととした。止血に有効であった最後の処置（鼻内パッキングまたは手術）施行から退院までの日数を比較すると、手術群で鼻内パッキングを行わなかった群では、手術群で鼻内パッキングを行った群および非手術群に比較し、有意に退院までの日数が約2日程度短かった（ $p<0.001$ ）。

【まとめ】

難治性鼻出血に対する蝶口蓋動脈焼灼を含めた手術室での止血対応は、早期の出血制御および入院期間短縮に寄与する有用な手段と考えられた。